

関西菌類談話会会報

2011年3月 No. 28



目 次

| | | |
|--|-------|----|
| 表紙 [キツネノヤリタケ] | 森本 繁雄 | 1 |
| カエンタケ (<i>Podostroma cornu-damae</i>) の毒成分研究 | 橋本貴美子 | 2 |
| クワの実から発生するキツネノワンとキツネノヤリタケの観察記録 | 出合 文子 | 4 |
| アシボソチチタケ似の <i>Lactarius</i> sp. 観察記録 | 小寺 祐三 | 6 |
| 大阪南港ポートタウンに生えたカゴタケ | 鎌田佐代子 | 8 |
| 兵庫県で発生したベニテングタケ | 山田 裕司 | 10 |
| 関西菌類談話会第476回例会 「2009年スライド大会」の記録 | | 12 |
| 表紙によせて、編集後記など | 編集委員会 | 20 |

カエントケ (*Podostroma cornu-damae*) の毒成分研究

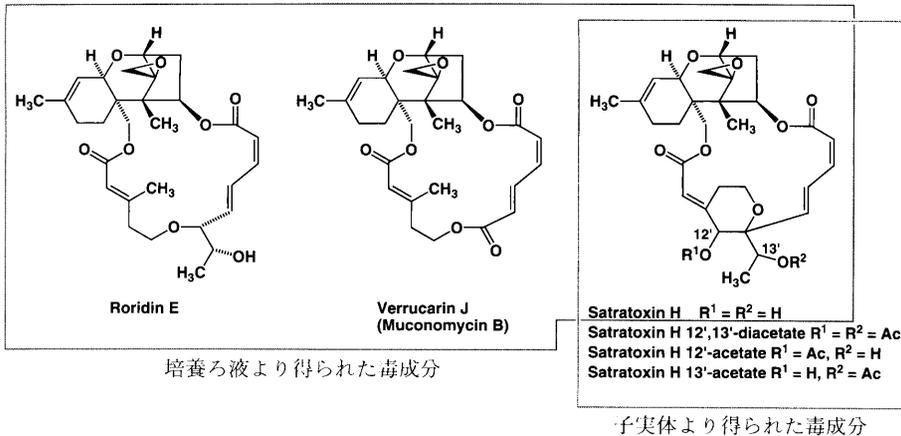
橋本 貴美子 (京都薬科大学)

今から15年程前のことである。当時関西学院大学の白濱晴久先生の研究室に勤務していたところに、関西菌類談話会の故丸本龍二さんが来られた。白濱先生は北大理学部の研究室におられた時からきのこの毒成分の研究をされていた。研究室ではツキヨタケ、オオワライタケ、ドクササコの毒の構造を決定し、その毒の構造を基に新しい有機化学を展開されていた。丸本さんはそれをご存知で、談話会加入のお誘いに来られたわけである。その時にいろいろなきのこの話をされたが、その中の一つがカエントケであった。当時は図鑑に載っていても、後ろのほうに載っている目立たない珍しいきのこのことであった。しかも食毒についての記載はなかった。丸本さんによれば、非常に毒性が強いということで、もし入手可能ならば毒成分の研究をしてみようと思っていた。

地方のきのこの会の方々から採集のお願いをしたまま3-4年が過ぎた頃、新潟の医師から電話があり、カエントケ中毒が起こったので、成分を調べて欲しいという。どれくらいのきのこの量があるのかと聞くと、乾燥したもので小指の先程の大きさという。未知物質の構造を決めるにはかなりの量が必要となる。一般に、化学を専攻する人以外は、“分析”という、なんでも機械にいれば何がどれだけあるという答が出てくるものと思っているようであるが、彼らも例外ではなく、人の命が関わっているわけだから早く！ということであったが、そう思うようにはいかない。私たちの研究は、きのこに入っているとんでもない数の化合物から原因物質を見つけ出し、純粋にして、さまざまな機器分析を行って、スペクトル解析をして、それでもダメなら反応させて誘導化して、またスペクトルを測定して…と化合物の構造を最初から組み立てていく(定性分析)。何が原因かわかっていて分析する(定量分析)のとは別種の分析である。中毒事故が起きた時に対応できないのは無念であるが、仕方なく言い訳した手紙を書き、すぐにはできない旨を知らせた(数年たってから出た結果を知らせたが、返事はいただけなかった)。この時に医師が伝えてきた

症状のうち、気になったのは白血球の数が異常に少ないということであった。

そうこうしているうちに、苦小牧きのこの会の方がカエントケを見つけたという連絡が五十嵐恒夫先生(北海道大学)から入った。それを当時森産業(大分)に勤務されていた須田隆さんにお願ひして菌の分離を行っていただき、更にそれを弘前大学の奥野智日先生のところまで培養をしていただいた。きのこの成分は菌糸と子実体では一般に異なっている。培養をしたからといって、毒が生産される保証はない。しかし、当時は珍しいきのこのことであったため、入手困難であることから、菌糸でも毒を作るかもしれないということで、培養をしていただいた。培養ろ液を酢酸エチルと水で分配し、マウスの腹腔内投与による毒性を調べると、酢酸エチルの抽出液の方に毒性が含まれていた。辛いことに、毒は安定であり、分離は比較的容易で、シリカゲルを用いたクロマトグラフィーを繰り返すことで単離ができた。毒化合物の構造を学生が解析した結果を見てびっくりした。猛毒のカビ毒の一つであるトリコテセン系の化合物であったためである。このきのこはカビに近い仲間であると須田さんに教えていただいていたので、“カビがつくる毒”¹⁾という本を読んでいて、その中の一つに“白血球が少なくなる”という記述を見つけたところだった。培養ろ液から得られたトリコテセン系の化合物は、ロリジンE (Roridin E) とベルカリンJ (Verrucarlin J)、サトラトキシシンH (Satratoxin H)であった²⁾。その後、きのこを採集しようにも、珍しいと言われてきたきのこであるため、どこに行けば発見できるのかわからず、自分で採集することはできないまま、夏が暑かった年の晩秋に発生するという話を信じて、各地で採集していただけるのを待っていた。この辺りから毎年どこかで見つかるようになったが、毎年新潟で発生するものを中林芳光さん(三条きのこの会)にお願ひして採集していただいた。三条きのこの会の方々にはドクササコ研究の時代から40年近くお世話いただいていることになる。きのこの量がある程度集まってから、抽出



操作を行うと、サトラトキシシン H 類 (Satratoxin H, Satratoxin H 12', 13'-diacetate, Satratoxin H 12'-acetate, Satratoxin H 13'-acetate) のみが得られた。菌糸と子実体ではやはり成分は異なっていることがわかった。また、この結果は別の条件で培養すれば、異なったタイプのトリコテセンを生産するのではないかと思わせる。培養できるということは、大量生産が容易であることを意味する。これはトリコテセン系化合物が兵器として使われることが危惧されている理由の一つである。

この研究を学会で発表した後に (2000年)、群馬県、山形県でまた中毒が発生し、毒について問い合わせがあった。鈴木昌幸先生 (山形県立中央病院) からは毒の性質について細かく聞かれた。分子量、タンパク質への結合性、水溶性か脂溶性かというものだったと思う。分子量は530~610程度の脂溶性低分子化合物であり、脂溶性が高い (水には不溶) ため、タンパク質の脂溶性部分に吸着する。これは、中毒を起こした患者にどのような処置をするかの選択のための質問である。脂溶性が高ければ活性炭を飲ませて吸着させて除去することができるし、分子量は透析処置をする時に、透析膜のどちら側に分配されるかという情報となる。幸いなことに、この患者は救命され、その際の症状、治療による病状経過が唯一正式な論文として発表されている³⁾。本稿の最後にその要約を記載する。専門家ではないので、説明不足や至らない部分があると思うが、詳細は論文を参照されたい。

カエンタケの毒はタンパク質合成や核酸合成を阻害し、細胞の生命活動を停止させてしまう性質をもつ⁴⁾。どのような機構で生命活動を止め、どのように代謝されていくのかを調べようにも、あ

まりに少量で効果がでてしまうために、分析できるほどの量を動物に投与できないことが研究の妨げになっているようである。それほどに活性が高く、しかも新鮮なきのこに大量 (0.3% w/w) に含まれていたことが、少量のきのこを食べただけで事故を起こす原因となった。誤って食べると敗血症や放射能による障害のような症状が現れる。食べずとも、きのこの液を皮膚につけると炎症が起るため、もし触った場合は石けんを使って (毒は水に不溶で脂溶性物質であるため) よく水で洗うことが必要である。毒の正体がわからないで実験を行っている過程で、学生の皮膚が脱皮を起こしたことがあった。猛毒が抽出される (しかも単離される時点では濃縮されている) 可能性がある場合は充分注意が必要であると反省した。

当時のカエンタケの中毒事故の際は、医師の方々から質問や情報提供があり、お互いに有益であったと思う。現在は個人情報管理があまりに行き過ぎたことによるためか、これがうまく行かなくなっている。中毒事故ニュースを知って、患者の入院した病院等に状況を問い合わせても、知らぬ存ぜぬという対応をされる。では後に正式の症状、経過の発表がなされるかということこれも期待できない。WEB 上を検索しても見つからない⁵⁾。未知の毒の正体を探る研究は手探りでトンネルの中に行くようなものであり、患者にどのような症状が出ていたかという情報は、どのような毒性試験を行えば良いのかとか、化合物の構造推定等に重要な情報となる。やっと解明した毒成分を発表すると、後から“患者さんの血液を保存してあるので分析してくれないか”などの問い合わせが来る。これもまた我々の分野の仕事ではないが、何故このように一方的な対応なのかと不満に思う。

こういう場合の情報提供については、解釈、対応が個々の責任において自由にできるようにならないものかと思う。

ふりかえてみると、たくさんの方々のお世話で研究が成り立っていることを確認させられる。上記の方々および実験を行ってくれた学生や教員の方々など論文の共著者に感謝致します。

—以下参考文献3より抜粋要約—

長さ2～3cmのカエンタケを食べ、中毒症状を発症したが救命された60歳代の男性患者の症例について³⁾

消化器症状：食後2時間程後から激しい嘔吐と水様下痢が始まる。

循環器症状：初期には蛋白漏出を伴う血管透過性亢進による血圧低下（毒が毛細血管を障害するためと推定される）。4日目をピークとして現れたSVR（全身血管抵抗）の低下と高心拍出量状態はエンドトキシンショック状態と似ている。循環不全によるショック死はこの時期に集中すると推定される。

皮膚・粘膜症状：食後2～3日の間は全身の紅斑様発赤、舌、口腔粘膜のびらんが主となる。後に全身皮膚の膜様落屑、頭髮の脱毛がおこる。これらも毒の皮膚毛細血管障害の結果と推定される。

白血球・血小板減少：ショック状態を乗り切った後（およそ1週間後）に白血球・血小板減少が始まる。原因は骨髄での産生抑制およびHPS（hemophagocytosis）。HPSは二次的な高サイトカイン血症により生じたと推定される。

低尿酸血症：5日目に血清尿酸値がかなり低下した。原因は尿細管の分泌亢進または再吸収障害と推定される。

治療上の要点

* 循環虚脱にならないように大量に補液できるか

どうか重要（ショック死を防ぐ）。

* 連続CHDF（持続血液透析濾過法）が毒の除去あるいは炎症性サイトカインのコントロールに有効であったと推定できる。

* 白血球・血小板減少に対し、G-CSF（granulocyte colony stimulating factor）使用と血小板輸血、単純血漿交換（HPSを抑制するため）を行った。

参考文献

1. カビがつくる毒, 辰野高司, 科学のとりば No. 30, 東京化学同人, 1998年.
2. Toxic principles of a poisonous mushroom *Podostroma cornu-damae*, Yoko Saikawa, Hiroki Okamoto, Taichi Inui, Midori Makabe, Toshikatsu Okuno, Takashi Suda, Kimiko Hashimoto, and Masaya Nakata, *Tetrahedron*, **57**, 8277-8281 (2001).
3. 猛毒キノコ「カエンタケ」食中毒の1救命例, 鈴木昌幸, 加藤喜信, 熊谷裕昭, 齋藤幹郎, 石川博康, 伊藤宏, 島津憲一, 中毒研究, **15**, 177-182 (2002).
他の中毒症例については各地のきのこの会会報や自治体の報告書, 病院での報告書を探すしかない。reference 2の参考文献, および reference 5の参考文献を参照されたい。
4. (a) Developments in Food Science 4 - Trichothecenes: Chemical, Biological and Toxicological Aspects, Ueno Y. Ed (Kodansha, Tokyo, 1983). (b) Grove J. F., *Natural Product Reports*, 429-448 (1993).
5. これまで記録のある中毒例については以下を参照されたい: 毒きのこ今昔—中毒症例を中心に—, 奥沢康正, 久世幸吾, 奥沢淳治 共編著, 思文閣出版, p 50, p 115-119 (2004).

クワの実から発生するキツネノワンとキツネノヤリタケの観察記録

出 合 文 子

この文章は、2008年12月7日のスライド会で発表した内容をまとめたものです。

キツネノワン *Ciboria shiraiana* (P. Henn.) Whetzel
とキツネノヤリタケ *Scleromitrla shiraiana* (P.

Henn.) Imai の観察記録です。

まず始めに、キツネノワン、キツネノヤリタケとクワについて、簡単に説明をさせていただきます。

キツネノワン…全体が淡褐色～褐色、大きさは1 cm 前後のコップ形～碗形で、柄が付いていて、春にクワの実の菌核から発生する子囊菌。

キツネノヤリタケ…淡褐色の先の鈍い槍の穂先状の1 cm 前後の子囊果と上部は淡褐色で下部が暗褐色の細長い2 cm 前後の柄からなり、春にクワの実の菌核から発生する子囊菌。

クワ…中国原産で、昔その葉を、絹を作るカイコの餌とするために広く栽培されていた木で、今は、放置され、野生化している。花は4～5月に咲き、雌株には6～7月に赤色から黒紫色に成熟したおいしい実を付ける。

私が初めてこれら2種のクワの実から発生するキノコ(図1)に出会ったのは、2007年4月26日のことです。友人の斎木治子氏から発生場所を教えてもらって、見に行きました。図鑑で見ても、実際に見てみたいと思っていたキノコだったので、初めて実物を見たときは、可愛くて感激しました。

季節を追って観察してみたら面白い記録が出るのでは?とのきっかけを下さったのは、井ノ瀬利明氏で、このキノコ達(菌)によって、クワの実はいつ頃この菌に冒されるのか?、菌に冒された実がどうなるのか?に興味をわいて継続して観察してみました。また、その生態について自分なりに推測してみました。

春、クワの花期が終わり、小さな緑の実を付ける頃に、クワの樹下にキツネノワンとキツネノヤリタケが発生します。この事から花ではなく、幼い青い実に直接胞子を吹き付けるのではないかと考えました(図2)。

その後、2008年5月17日の観察で、クワの実には、赤くなる実と白くなる実がある事に気がつきました(図3)。

赤い実は柔らかく、熟すと黒く甘くなります。地上に落ちてからも、すぐに腐って無くなってしまいます。

白い実は硬くなり、甘くは熟さず、地上に落ちてからも形をとどめ、徐々に黒くなっていきます。この硬く黒くなった実が菌に冒されていて、来年の春にキノコが出るのではないかと考えました(図4)。



図1 クワの実から発生するキツネノワンとキツネノヤリタケ(2008年4月19日撮影)

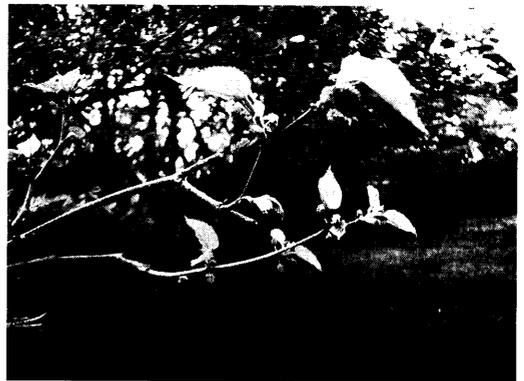


図2 小さな緑の実を付けるクワの枝(2008年4月19日撮影)



図3 赤いクワの実と白いクワの実

そこで、硬く黒くなった実を小さな植木鉢に5～6個置き、自然の状態に近づけるためにその上にコケを乗せて、キノコが発生するかどうかを観察しました。

2008年の春、桜の花が散る頃になって、植木鉢に植えたクワの実からキツネノワンとキツネノヤリタケが出てきました(図5)。

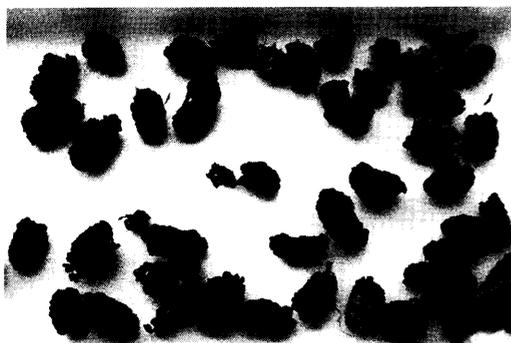


図4 硬く黒くなったクワの実

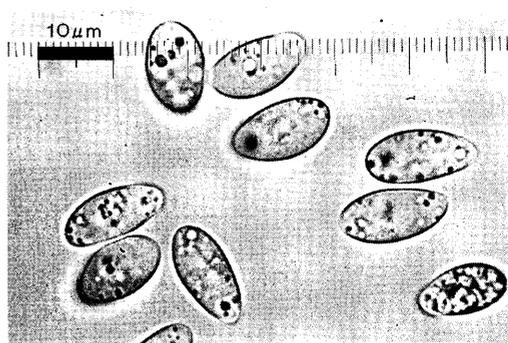


図6 キツネノワン子嚢胞子 (顕微鏡1000倍での撮影. 小寺祐三氏撮影)

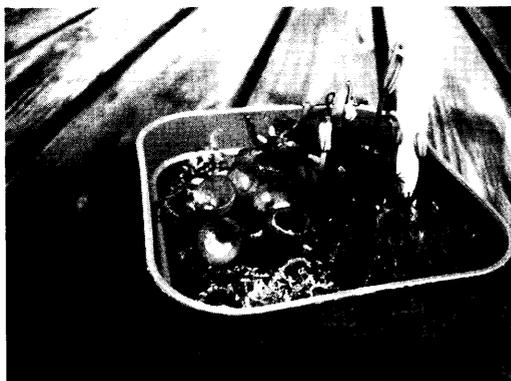


図5 植木鉢に発生したキツネノワンとキツネノヤリタケ

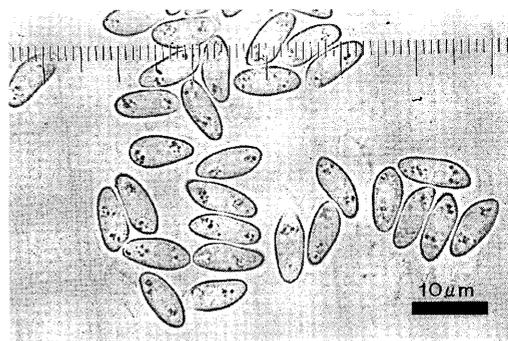


図7 キツネノヤリタケ子嚢胞子 (顕微鏡1000倍での撮影. 小寺祐三氏撮影)

やはり、これらのキノコは、樹上に実る若い青い実に胞子を飛ばしているのだらうと思われました (図6, 図7)。

この観察をするきっかけをくださった齋木治子氏、助言をいただいた井ノ瀬利明氏、胞子の顕微鏡写真を撮影・提供いただいた小寺祐三氏には、とても感謝しています。この場を借りてお礼申し

ます。

参考文献：「山溪フィールドブックス10 きのこと」 本郷次雄ほか、山と溪谷社、1994。「兵庫のキノコ」 兵庫きのこ研究会、神戸新聞総合出版センター、2007。「樹に咲く花 離弁花1」 石井英美ほか、山と溪谷社、2000

アシボソチチタケ似の *Lactarius* sp. 観察記録

小寺 祐三

2009年11月21日、滋賀県瀬田丘陵の龍谷大学の森に、アシボソチチタケに似たきのこが多数発生していました (図1)。3個体を採集し、胞子を落としてからヒダ断面を切り出して検鏡したとこ

ろ、担子器が並ぶ中で少数ですが、ステリグマ (=担子器の小柄) が異常に伸長しているものが存在していました (図2~6)。驚異的に伸長したステリグマを観察したことは今までになかった

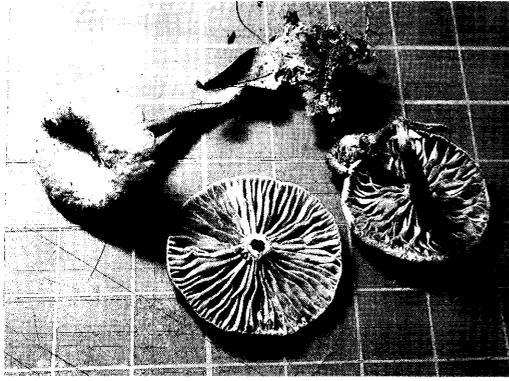
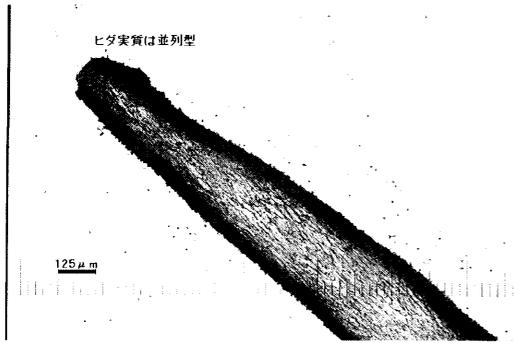


図1 カサの直径2.5センチ前後、肌色の地に細かな凹凸状のしわがあり、中央は窪む。柄はカサと同色で中空、0.4 cm 前後で長さは4 cm 程度。柄の基部には落葉などを纏うが、多くの菌糸を纏うことはない。



ヒダ実質は並列型

図2 ヒダ切片（フロキシソ液浸）

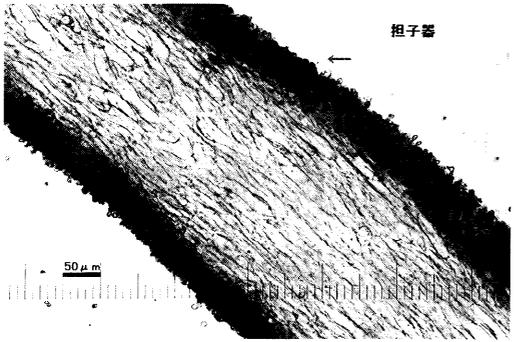


図3 ヒダ実質は並列型

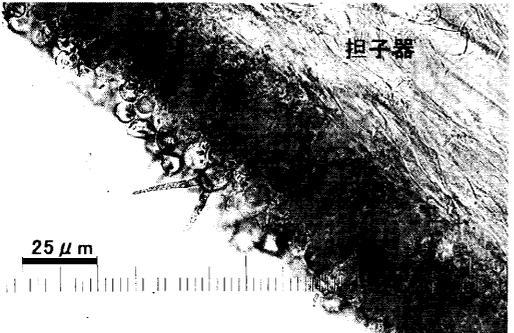


図4 伸長開始直後のステリグマ

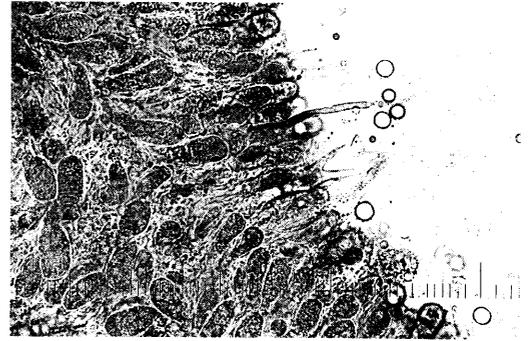


図5 伸長が始まっているステリグマ

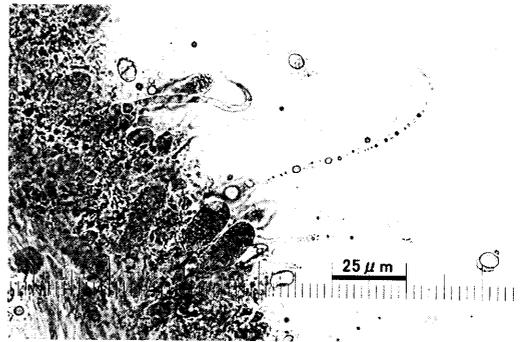


図6 100 μm 近く伸長した1本のステリグマ

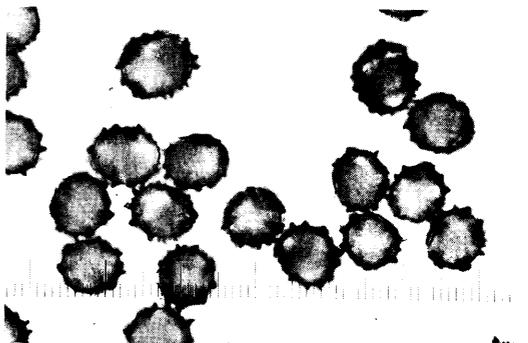


図7 メルツァー液浸での胞子輪郭部に焦点

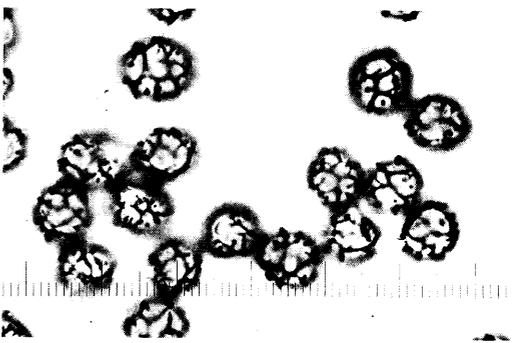


図8 胞子表面に焦点
胞子は $7.52 \sim 9.04 \times 6.85 \sim 7.53 \mu\text{m}$, $Q = \text{平均値}1.17$

ことで、ヒダの切片1枚だけでは偶然的なものかもしれないと考え、同個体の別のヒダも切り出して観察したのですが、最長で100 μm 近いステリグマが存在しました。通常の担子器が大半でしたが、それらは殆どが4胞子生であるのに対し、ステリグマが異常に伸長しているものは2本、その中でも1本だけが特別に長く伸長していることを

確認しました。これはどういうものなのか全く不明です。以上はその撮影結果からの報告です。参考までに、胞子の顕微鏡撮影写真も載せておきます(図7, 8)。このキノコは8月頃から11月まで発生するので、今後の継続的な観察が必要と考えています。

(連絡先: 京都市左京区岩倉南平岡町56)

大阪南港ポートタウンに生えたカゴタケ

鎌田 佐代子

2009年6月、丸いボールのようなカゴタケの卵からかごのような形のきのこが出てくる様子を観察したので報告します。

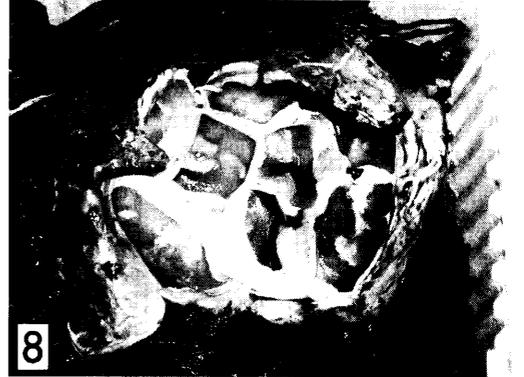
観察した場所は、大阪市住之江区の南港ポートタウン内を流れる人工の川の周辺の雑木林です。南港ポートタウンは大阪湾の埋立地で造成されてから30周年を迎えます。その人工の雑木林には、クスギ、イチョウ、カエデ、ナンキンハゼ、メタセコイヤ、サクラなどが育ち、大きいものは高さが集合住宅の4階ほどにもなります。

以前から気になっていたのですが、2009年春から、本格的にカメラ持参できのこ観察を始めたところ、雨の後にたくさんのきのこが発生することがわかりました。とくにテングタケ、ウスキテングタケ、ヤマドリタケモドキ、アワタケ、ヘビキノコモドキなどが大発生しました。ハナオチバタケ、スジオチバタケ、ヒメコウジタケのような小さなきのこも発見したし、カゴタケにも会ったのです。

2009年6月30日、前日に雨が降った暑い日、カゴタケに会いました。古い切り株の横に生えていました。(図1)。

根元を撮影しようと落ち葉をどけたら卵が出てきました。撮影後、明日観察するために、再び落ち葉をかけておきました。その数分後……。足下で何かが動いていると思ったら、卵が割れてにゅるにゅる動いてかごが出てきました。8分ほどで





大きくなりました (図2, 3)。

次の朝 (7月1日) 見ると、きれいにふくらんでいました。二つあわせて 20 cm くらい。かすかに甘いようなにおいが漂っていました。(図4)

図5は、とりにあったもう一つのカゴタケ。ダンゴムシが食べています (7月1日)。

7月3日にはかなり食べられてしまっています。最後はどろどろにとけて、南港ポートタウンの「土」になりました。(図6)

【後H談】

半年後の11月中旬、その辺りの落ち葉をどけてみると、うす茶色のカゴタケの卵らしいものがあ

りました。数日観察しましたが、寒さのせいで変化がないようだったので、思い切って家に持ち帰ることにしました。

毎日、ビニール袋の上から触ってみました。テニスボールのような弾力がありました。11月下旬になると感触が変化し、卵の中にひものようなものができてきたように感じられました。捨てようかと思っていたのですが、観察を続けることにしました。

そして、12月1日朝。卵が割れていました。室温18°C。卵が割れましたが、動きはゆっくりで3時間かかって開きました。

托枝 (かごの部分) は、「屏風たたみ」になっ

留学までしているのに対し、大上宇市の家庭は非常に貧しく、貧困のため小学校を2年で退学し、在野で動植物の研究を続け、一度も東京にすら行くことなく独学で研究をした。

菌類に対しても非常に力を注いでおり、安田篤氏の指導を受けながら「二千菌譜」を著しており(未完)、その「二千菌譜」の中にアシタカベニタケとしてベニテングタケ *Amanita muscaria* を記録している。記録によれば、大正4年(1915)8月24日に播磨国揖保郡西栗栖村角亀坂(現：兵庫県たつの市新宮町)で本人が採取している。特徴として「菌柄は中実なれど後に中空となる。」「基脚部に卵円形の鞘を具ふ、この鞘は横に数多くの環線あり。」と、詳細に記録している。

採取場所の標高は200~400 mでシラカバが自生できる標高ではない。また、大正時代に当地にシラカバが植栽されていたとも考えにくい。標高からミズメも自生していなかったと思われる。宇市が見たベニテングタケのホストは何だったのだろうか？

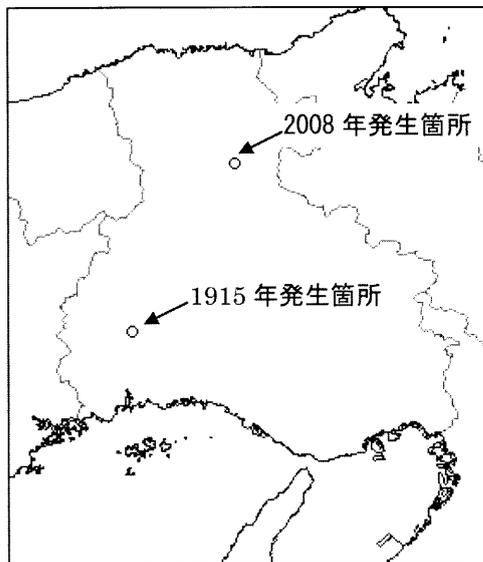
2 93年ぶりに発生したベニテングタケ

宇市が記録してから93年ぶりの2008年に兵庫県内でベニテングタケが見つかった。発生箇所は兵庫県朝来市で、標高は約260 m。人為的に改変された斜面で、下草刈り等の管理が毎年されている箇所であった。非常に人の目につきやすい斜面で、以前から発生していたとは考えられない場所だ。

2008年は、10月中旬から、1~3個体づつ12月初旬まで3回発生した。2009年も10月下旬から12月初旬まで3回発生した。93年ぶりの発生にしては、派手な登場の仕方であった。

このベニテングタケの周辺には自然林はなく、

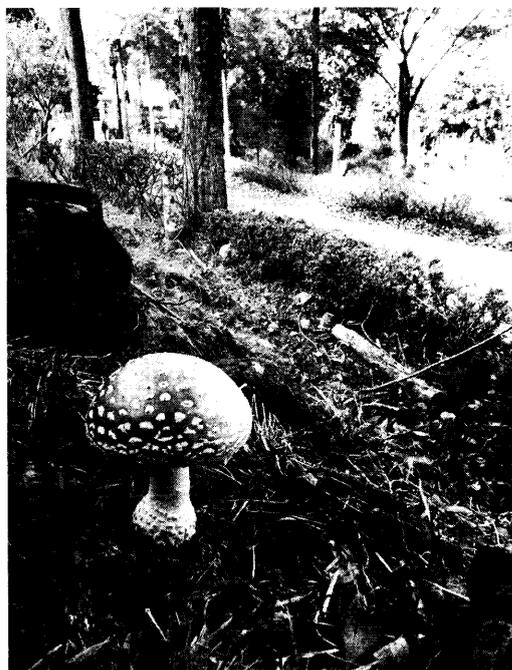
すべて植栽された樹木ばかりであったため、ベニテングタケのホストがウラジロモミ(胸高直径約25 cm)であることはすぐにわかった。ウラジロモミの植栽の記録を調べてみると、1993年に3 mの苗木の状態、長野県か福島県の苗畑から来たことがわかった。(モミと間違えて植栽されたようだ。)



ベニテングタケの発生箇所



ベニテングタケとウラジロモミ (撮影 平山吉澄氏)



発生環境 (撮影 増田克也氏)

つまり、このベニテングタケは1993年に長野県か福島県産のウラジロモミと一緒に持ち込まれたと思われる。

3 大上宇市のベニテングタケのホストは何か？

大上宇市を見たベニテングタケのホストもモミだったのだろうか？

オーストラリアやニュージーランドでは、北米原産のラジアータ松と一緒にベニテングタケが欧米から持ち込まれ、ラジアータ松の植林地にベニテングタケが普通に発生している。日本でも、ベニテングタケがブナ科の林内でも見られると言われている。

宇市を見たベニテングタケも、マツやモミ、またはブナ科の広葉樹など、案外身近な樹種をホストとしていたのかも知れない。

4 ベニテングタケの侵略性

ところで、ニュージーランドでは、ナンキョクブナの原生林でもベニテングタケの発生が確認されるようになり、京都大学の田中千尋先生は、ベニテングタケの侵入・定着の危険性を指摘されている。今回の朝来市の事例でも、外部から持ち込

まれたこの菌の強い生命力が見られた。

兵庫県内でベニテングタケをはじめて見ることができ、身近で観察できるようになったことは非常に喜ばしいことではあるが、ベニテングタケの侵略性を考えると、そう喜んでばかりもいられない。

参考文献

今関六也・本郷次雄. 1987. 原色日本新菌類図鑑 (I). 株式会社保育社

大上宇一. 1922. 二千菌譜. たつの市教育委員会所蔵. p 177

※大上宇市は、投稿時や著作物へは「大上宇一」と記している。

工藤伸一. 2009. 東北きのこ図鑑. 社団法人家の光協会

さいわい徹. 1996. まんが大上宇市. 兵庫県揖保郡新宮町

新宮町教育委員会. 1992. 郷土の偉大な博物学者 大上宇市. 兵庫県揖保郡新宮町

田中千尋. 2006. 菌類の外来種問題—それってなあに—. 日本菌学会講演要旨集「菌類にもある外来種と絶滅危惧種問題」. 日本菌学会 (連絡先: 兵庫県揖保郡太子町矢田部344-7)

関西菌類談話会第476回例会 「2009年スライド大会」の記録

日時: 2009年12月6日(日) 10:30~16:30

場所: 京都女子大学 C-305講義室

世話人: ○小寺祐三, 高桑 進, 下野義人, 森本繁雄, 橋屋 誠, 上田俊穂(記録), 丸西一枝, 梶山直樹, 梶山昭子, 斎木達也, 丸山健一郎(順不同)

挨拶: 衣田雅人会長, 京都女子大学 高桑 進先生

1 矢野仁久: 京都御苑のきのこ

京都市の真中にある京都御苑には一年を通じて多くのきのこが発生する。その一部を紹介する。

(1) ミヤコホウライタケ類似種 *Marasmius* aff. *echinatus* 四手井淑子さん命名のきのこに類

似する。

(2) アクニオイタケ *Mycena stipitata* すり潰すと塩素系の薬品臭がある。

(3) チャタマゴタケ *Amanita similis* 今年は黄や白いタイプも多く発生した。

(4) アカキツネガサ *Leucoagaricus rubrotinctus* 傘: 赤褐色繊維状の地に暗赤褐色の細かい鱗片をつける。

(5) ヤナギマツタケ 大きなつばあり, 爽やかなきのこ臭がある。

(6) チャムクエタケモドキ *Tubaria furfuracea* 柄の基部は白色菌糸毛につつまれ, ひだはやや粗い。

(7) チチアワタケ 傘: 栗褐色, 著しい粘性があ

- り、つばはない。
- (8) コウジタケ 管孔・孔口黄色，青変性。麴のような甘い香りがある。
 - (9) オニイグチモドキ 傘：ほぼ黒色，繊維質の固い角状鱗片に覆われる。
 - (10) カワリハツ いろいろな色彩に富み，見分けにくい。
 - (11) アカハツ ひだは傷つけると橙紅色の乳液を少量出すが変色しない。
 - (12) カレエダタケ 子実体はホウキタケ状で先端はトサカ状で形の変異は大きい。
 - (13) モミジウロコタケ 傘：多数が重なり群生。乾くと各片は両側から下側に湾曲する。
 - (14) ハナビラタケ 子実体は類白色のハボタン状。柄の先端部はハナビラ状にうねる。
 - (15) ワヒダタケ 傘：半円形，表面はさび褐色～黒褐色，密毛に覆われ，環紋がある。
 - (16) ノウタケ 球形の頭部と下方が細くなった基部よりなる。
 - (17) ヒメキクラゲ 子実体は球形から成長に伴い不定形に拡大する。大脳の表面のようなしわがある。
 - (18) シロキツネノサカズキモドキ *Microstoma macrosporum* 子囊盤頂部の椀内側が鮮赤色で，その美しさに感動した。
 - (19) ヒイロチャワンタケ 子実層面は緋色～赤紅色。外側は淡朱色，白色粉毛を帯びる。
 - (20) クモタケ 地中のキシノウエノトタテグモに寄生。きのこは無性世代の巨大な分子子束である。

2 出合文子：エリカと菌根菌

園芸植物のエリカにはエリコイド菌根菌という菌がついている。

エリカの品種でダーレンシス (*Erica* × *darleyensis*) の菌根菌の事が，インターネットの「きのこ雑記」に出ていたのだから，それを確かめたかった。「きのこ雑記」に載っていたのはダーレンシスの赤花であった)

エリカとはツツジ科植物の属の一つで，大部分が南アフリカ原産の 20～150 cm の低木で，俗にヒースと呼ばれるものである。700種類の内，630種類は南アフリカ原産である。「きのこ雑記」の写真では子囊菌類のズキンタケ型のきのこが紹介されていた。

エリコイド菌根菌はツツジ科の植物とチャワン

タケの仲間が中心となり菌根を形成し，有害物質の作用の緩和などの働きをしているという。

上壤改良剤入りの土で栽培されたエリカにきのこが出たと思っている。11月18日ころから開花し始めた。挿し木でも根付くが，きのこは発生しなかった。なお，きのこは年中発生するわけではない。

今年(2009年)は11月中ごろ，越年したダーレンシスの白い花が咲き始めた時，白いソウメンタケ型*の担子菌が発生した。昨年は「きのこ雑記」のと同じで，白いズキンタケ型が発生したのだが，越年した今年は白いソウメンタケ型のきのこが発生したので，とても不思議に思っている。(*シロソウメンタケではない)

その白いソウメンタケ型のきのこは，2009年に，当時鳥取大学大学院生の奥田彩子さんに送った。今まで誰も DNA 鑑定はした事が無いので是非してみたいという事であった。また，そういう形の菌根菌があるという事は奥田さんからお聞きした。(発表内容に多少追加した)

3 梶山直樹・昭子：福島虫草祭での冬虫夏草

2009年7月31日から8月2日まで福島県男沼，女沼，仁田沼，土湯温泉周辺で見られた冬虫夏草の紹介。

- (1) 森の中に，見張り番梅宮辰夫人形があった。
- (2) ミナズキタンポタケ *Cordyceps minazukiensis*
- (3) ミチノクコガネツブタケ *Cordyceps geniculata* (京都にもあるが少し形態が違う)
- (4) カメモシタケ *Cordyceps nutans*
- (5) クチキムシツブタケ *Cordyceps cuboidea* (京都にも産する。甲虫の幼虫から発生する)
- (6) コメツキタンポタケ *Cordyceps gracilioides* f. (大山にもあった)
- (7) コブガタアリタケ *Torrubiella* sp. (今回，追跡の対象になった種類。1つのツツジの枝に5つほど着いていた)
- (8) タマゴタケ
- (9) 「きのこ柄のゆかた」の紹介
- (10) 虫草入りのスープが出たが，食べるのに躊躇した。冬虫夏草にはとくに味はなく，結局1つだけ食べてあとは標本にした。

4 大久保泰和：関東のきのこ探索

関東のあちこちでのきのこ観察報告。

- (1) 東京へ3月に転勤したのでそこできのこの探索を始めた。奥武蔵・西東京あたりの自然が豊

かで、夏まで山歩きばかりでこの話題はない。

- (2) セミのなく季節になったが、東京の市街地（東陽町）ではミンミンゼミが主役、クマゼミに占領されている大阪御堂筋に比べて鳴き声の暑苦しきは格別である。
- (3) 千葉菌類談話会で佐倉城址へ行った（7月18日）がきのこは少なかった。西尾きのこの会中條さんが持参されたミカワクロアミアシイグチが話題となった。
- (4) 軽井沢（7月20日）では別荘地にタマゴタケ、ベニタケ類、ヒダナシタケ類などきのこが豊富であった。
- (5) 戸隠（8月22日）ではシラヒゲソウを見た。きのこの発生量が多く、傘にしわのおおいツエタケ、サカズキホウライタケに似ているきのこ、シロハツの畸形、二階建てのフクロツルタケ（畸形）、材上生のナヨタケの仲間、カラハツタケ、カヤタケ？、カブラアセタケ？、ハナイグチなどがあつた。
- (6) 千葉県市原市梅ヶ瀬溪谷（9月5日）に行ったが大変不便なところ。「砂」でできた溪谷に驚いた。雨が少なくきのこは少ない。アズマヒキガエル、ツエタケ、青いカニを見た。
- (7) 富士山のふもと（足和田山9月26日）では脚部が長いホコリタケ類、ハナイグチを見た。雨が少ないため富士五湖の青木ヶ原はからからに乾燥しきのこがなかった。
- (8) 千葉県泉自然公園（千葉菌類談話会観察会9月27日）では、キヒダマツシメジ、コバヤシアセタケ、ヒロハンデチチタケ、トビチャチチタケ（紫色に変色）、チチタケ属 sp.、キショウゲンジなどを見た。
- (9) 白糸の滝（軽井沢から車で30分。10月10日）コナサナギタケ、群馬県の鬼押し出し公園では溶岩の上にシモフリヌメリガサを見た。
- (10) 埼玉県の武蔵森林公園（10月17日）（11月7日）ではヒメムラサキシメジ、ドングリキンカクキン、ミヤマタマゴタケ（傘の直径20cmを超える）、ワタゲナラタケ、シロヌメリイグチなどを見た。
- (11) ミズナラは目立つがアベマキが見当たらない？、カバノキ類が多い、ヒダリマキマイマイ（カタツムリ類）がいるなど、関西とは違う自然が少しずつ見えてきた。
- (12) 市原市民の森（千葉菌類談話会観察会10

月18日）ではバカマツタケ、ホンシメジ、*Squamanita* sp.を見た。

- (13) 再び泉自然公園（11月8日）ではクロラッパタケ、シロヌメリイグチ、スギエダタケなど。
- (14) 海浜性のきのこがあると聞いて富津公園に行く（11月28日）。目当てのキノコはなかったが、一面のクロマツ林中にニセマツカサシメジ、ササタケ？、マツカサキノコモドキ、ハリタケ？などがあつた。

関東では、関西とは違うきのこが見られるように思えた。

5 村上康明：大分と九州のきのこ

興味あるきのこの紹介

- (1) 10月22日、コナラの立ち枯れ木に白いツキヨタケがたくさん発生していた。白いツキヨタケについては、大分県玖珠町でヒラタケと間違つた中毒事例もある。ツキヨタケはシイのホダ木に生えることもある。
- (2) 大分きのこ会30周年記念行事、大分と九州のきのこ図鑑の発刊、30周年記念会報の発行
- (3) プンゴツボマツタケ（仮称）新種
- (4) プンゴシワカラカサタケ（仮称）日本新産種（つばが下方にあり、つぼと見まがうこともある。クランプはない）
- (5) ルリハツタケ（スダジイ、アラカシ樹下）
- (6) ニオウシメジ（大分県では毎年発生し、多い年は6件。1ヶ所で4年間ほど発生し、消滅する）
- (7) ツチグリカタカワタケ（「かたわ」という言葉の使用がよくないと“ツチグリニセシヨウロ”に改称されたが、ツチグリカタカワタケの誤引用であり改称の必要はない）
- (8) コガネシヨウロタケ（青木新称）胞子に翼状の突起があり半地下生（宮崎、大分、広島、関東）
- (9) 九州におけるケシボウズタケ類の分布を砂田洋一氏が調べた。たとえば、アバタケシボウズタケ（仮称）は大分県、宮崎県、鹿児島県に、ケシボウズタケは大分県と鹿児島県に、ウネミケシボウズタケは大分県と宮崎県に産する。ナガエノホコリタケは波打ち際から50～100mに発生し、1000倍で胞子を観察すると翼状の突起が見える。ウネミケシボウズタケの胞子には渦巻状の畝（うね）が見える。
- (10) シイノトモンビタケ、大分県三重町のサル

スベリに発生。群生すると美しい。

- (11) イボセイヨウシウロはクスギ・コナラ林の湿った場所に発生する。

—休憩—

6 齋木治子：きのこ標本作成講座に参加して

きのこ標本作るための乾燥機には、外国製のドライフルーツを作る器具、上田が作ったやや大型のもの、佐久間が作ったダンボールと小型温風器を組み合わせたもの、ひよこ電球による熱を利用するものなどがある。齋木製のはひよこ電球、ダンボール箱、篩、アルミ箔、両面テープなどを使い3000円で30分でできた。

乾燥機を使って作った *Pluteus* の乾燥標本を調べてみた。

ヒロベニヒダタケの生標本と乾燥標本の比較：傘の直径は3 cm から 2.5 cm になった。緑シスチヂアは生標本と比べると、乾燥標本では KOH に浸すとよい結果が得られた。胞子に関しては生標本を水で封じたプレパラートに比べて、乾燥標本を KOH で封じたプレパラートではサイズが大きめになった。フチドリクロチチタケも大きめになった。

キンチャワンタケは生標本と乾燥標本では、子嚢や胞子の肉眼的形状はほとんどおなじだったが、サイズは大きくなっていった。大きくなる比率は未調査である。

乾燥標本は役立つが顕微鏡的にはサイズが大きめになるので注意が必要である。だから乾燥標本を基にして計測することに注意が必要かもしれない。

7 小寺祐三：信用菌庫からの報告

- (1) 植物遺体から出るきのこ。大日岳山頂のブナの倒れた巨木に発生するコフキササルノコシカケ。
- (2) 山科、元慶寺にあるサクラの根元は腐り、コンクリートが詰められているが、隙間から硬質菌が出ている。
- (3) 龍谷の森（滋賀県大津市）、アカマツ林の端にウスキノサガサタケが多数発生した。朽ちたアカマツの材上には菌糸束が這いまわっている。
- (4) 左京区尾越の路傍に仮称アカパニセクロハツが多数発生していた。胞子の大きさは $5.92 \sim 7.62 \times 5.26 \sim 6.34 \mu\text{m}$ （突起部分を含まず）
- (5) 龍谷の森のアシボツチチタケに似た *Lactarius*

sp. のひだに異常に長い小柄（ステリグマ）をつけた担子器を見つけた。このきのこの胞子の大きさは $7.52 \sim 9.04 \times 6.85 \sim 7.53 \mu\text{m}$ であった。

- (6) 京都御苑の「母と子の森」で見たキスオオフクロタケ。ひだ内部の菌糸配列は逆散開型、緑シスチヂアが多い。胞子紋は褐色。
- (7) 京都御苑のムクノキの巨木を2004年に写したものの。そこにコフキササルノコシカケが発生し2009年8月にはほぼ朽ち果ててしまった。菌だけでなく人為的な分解も入っていると思うが主役はコフキササルノコシカケだろう。
- (8) 枯れたコナラの根元周囲に発生したカエンタケ。「マツタケ十字軍」のメンバーにより高さ10 cm の大物が発見された。子嚢には16個の胞子が入っているが、2個ずつくっついている。発生は京都市静市の山林。
- (9) 京都御苑。去年の松毬から *Podostoloma* sp. が発生しているのを10月に発見した。未熟なときは黄色だが成熟すると黒くなり、表面には白色の微粉状の子嚢胞子が付着する。子嚢胞子は長さ $5 \mu\text{m}$ でカエンタケ (*Podostoloma cornu-damae*) に似ている。
- (10) 左京区の修学院の山道でヤマブシタケの発生を見た。こんなところに発生しているのは驚きであった。

8 波部 健：キノコンボール乙「こいつは春からめでえなあ（もう冬だけど）」の巻、「千葉菌類だ不休さん」の巻

コミカルなサウンド付き。各地のきのこの紹介。

- (1) 京都御苑 トガリアミガサタケ、チャタマゴタケの茶色系・黄色系・白色系、イグチの仲間、カラカサタケ、オオシロカラカサタケ、エノキタケ、猫。
- (2) 8月20日～21日 鳥取での菌学会大会の様子、*Agaricus* sp.
- (3) 7月5日 関西菌類談話会の甲山での観察会。ミヤマタマゴタケ、コテングタケモドキ、タマゴテングタケモドキ、ヤマドリタケモドキ。
- (4) 7月19日 関西菌類談話会の箕面公園での観察会。ヒロヒダタケ、ハマクサギタマゴタケ *Amanita* sp.
- (5) 9月19日 大阪市立自然史博物館「きのこのヒミツ」展の様子。
- (6) 9月26日 千葉県房総の村風土記の丘での観察会。シロオニタケ、ドウシシタケ、タマゴタ

ケ, *Amanita* sp., クロハツ, ガンタケ, ミヤマ
タマゴタケ, ハツタケ, 鑑定会のようななど.

- (7) 9月27日 千葉市泉自然公園での観察会.
キショウゲンジ, ヒロハシデチチタケ, チ
チタケ属, ウラムラサキシメジ *Tricholoma*
porphyrophyllum, トビチャチチタケ, ミヤマ
タマゴタケ, 黄色い *Amanita* sp. など.
- (8) 8月16日 京都市清水山のきのこ. カバイロ
コナテングタケ, シロオニタケ, シロオニタケ
モドキ *Amanita hongoi*.
- (9) 10月4日 京都府立植物園でのきのこ展のよ
うす.

9 橋屋 誠：富山県で見られたきのこ

富山県は、本州中央部の中部地方北側に位置
し、日本海側気候が卓越する。標高も海岸から
3,000 m まであって、自然環境は変化に富んでいる。

- (1) キチャワシタケ *Caloscypha fulgens* 富山県
ではじめての記録になる。
- (2) 氷見市のシイ林 富山県の林は日本海側で北
限に近い。
- (3) ウズタケ 氷見市の神社のシイ林床で見られ
た。
- (4) ウッドチップ上の子囊菌類。冬虫夏草に似て
いる。
- (5) *Amanita* sp. ヒメコナカブリツルタケを赤
くしたようなきのこ。「東北きのこ図鑑」に
載っているコナカブリベニツルタケ *Amanita*
croceofarinosa ined. ではないかと思っている。
- (6) ニシキイグチ *Boletus bicolor* Peck 富山県
初記録。
- (7) タマハジキタケ ウッドチップ上に発生して
いた。富山県初記録。
- (8) チヂレタケ 北陸地域初記録。
- (9) ツバササクレシメジ *Tricholoma cingulatum*
有峰 (高度 1100 m) 晩秋のブナ林のヤナギ類
(イヌコリヤナギ, オノエヤナギ) の近くにあっ
た。
- (10) ナメコ 巨大なナメコで傘の直径は 14.3 cm
あった。
- (11) 今年のきのこ部会でのきのこ鍋, 入れたきの
この類は31種で少なかった。以前は50種類以上
あったのに…
- (12) 富山県で採集したいきのこには, チャタマ
ゴタケ, ムサシタケ, アリノタイマツがある。
アリノタイマツは福井, 日田, 京都, 大津 (上

田が追加) で見つかった。

10 森本繁雄：2009年の記録

- (1) 京都御苑できのこ観察の指導をする佐野修治
さんの「追っかけ」の写真。
- (2) スメリスギタケモドキ
- (3) 植物の写真。「おまけ」に, きのこの写真。
ヤマボウシ, ウケザキオオヤマレンゲ, モミ,
ゴムタケ, ムヨウラン, アカハツ, スジオチバ
タケ, ネジキ, ヤブニッケイ。
- (4) *Marasmius* sp.?, ハナサナギタケ, キイロ
オオフウセンタケ (仮称), シイノトモンビタ
ケ (シマサルスベリの朽木上に発生)
- (5) トラシマチチタケ (仮称) *Lactarius* sp. 傘
を縦に切断すると傘の肉の切り口に虎斑模様か
見える。関西の低地生の「キカラハツモドキ」
と呼んでいるのは, 多分このきのこである。ひ
だが浅く分岐し, 乳液は白色から灰緑色に変色
する。コナラ林などに発生する。
- (6) リュウコクヒナベニタケ (仮称) 腐朽材に発
生する。
- (7) フクロタケ属のきのこ (コゲチャヒメフクロ
タケ (青木仮称) に似ている。
- (8) ミヤコホウライタケ (京都御苑産)
- (9) コフクロツチガキ (名古屋)
- (10) 京都府立植物園のきのこ: ジャガイモタ
ケ, クロトマヤタケモドキ?, クマシメジ,
Geastrum 属の不明種 (Lohwag, H. 1938の凶,
Geastrum fimbriatum? か *G. formicatum*? か),
テーダマツ樹下のショウロ類 *Rhizopogon* sp.
- (11) 龍谷の森のきのこ: ケコガサ属で胞子に翼
状の突起があり, シスチジアの先端が球状に膨
れていた。ワサビタケその他。

—休憩—

11 鎌田佐代子：大阪南港ポートタウンに生えた『カゴタケ』

ポートタウンは大阪湾の埋立地で30周年を迎え
た。観察した場所は咲島高校の南側を中心とした
人工林である。

そこには次のような色々なきのこが発生する。

- (1) ハラタケ属の一種, (2) イタチタケ, (3) ヒ
トヨタケ属の一種, (4) アミガサタケ, (5) イボ
テングタケ, (6) ニオイワチチタケ, (7) アカハ
テングタケ, (8) スジオチバタケ, (9) ナガグロ

モリノカサ, (10) ヤナギマツタケ, (11) ヤマドリタケモドキ, (12) キツネノハナガサ, (13) アワタケ, (14) シロソウメンタケ, (15) テングタケ, (16) テングツルタケ, (17) ケショウハツ, (18) ムラサキカスリタケ, (19) ウスキテングタケ, (20) ニセアシベニイグチ, (21) クロハツ, (22) シバフタケ, (23) ハナオチバタケ, (24) ヒイロタケ, (25) ヒメコウジタケ, (26) ヘビキノコモドキ, (27) ノウタケ, (28) カワラタケ, (29) オオシロカラカサタケ, (30) スミレホコリタケ, (31) ヒラタケ, (32) ササクレヒトヨタケ, (33) チチアワタケ, (34) ハツタケ, (35) アカハツ, (36) ハタケシメジ, (37) ムラサキシメジ, (38) エノキタケ, (39) テングツルタケ, (40) ニオイコベニタケ, (41) ヒメコガネツルタケ, (42) カゴタケ など.

カゴタケは「たまご」から8分くらいで大きくなる。カゴタケの展開の様子が詳しく紹介された。

(カゴタケの展開の様子は本号で報告しています)

12 山田裕司：兵庫県で発生したベニテングタケ

兵庫県内では、大上宇市が、大正時代(1915年8月25日)にベニテングタケを採取し、記録を残している。採取場所は、県の南西部の播磨国揖保郡西栗栖村(現：たつの市新宮町角亀)で、当時は貧弱なやせ地であったと思われる。ホストはいったい何だったのだろうか？

大上宇市が発見してから93年ぶりに、2008年兵庫県北部の朝来市で発生した。2008年は10月14日～12月初旬まで3回発生し、2009年も同様に3回発生した。高度は265mで、人為的に手が加えられた斜面であった。ホストはウラジロモミと思われる。ウラジロモミは1993年の用地造成の際に3mの苗木として植栽された。苗木を調べてみると福島県か長野県松本から持ち込まれたようで、苗木の根にベニテングタケの菌が付いてきたと思われる。

ニュージーランドでは、北半球から持ち込まれたベニテングタケが、ナンキョクブナにも広がっており、外来種としての危険性も指摘されている。

(なお、本件の詳細については、別途この会報で報告しています)

13 東 勇太：今年見た冬虫夏草

今年(2009年)、京都市内、芦生研究林、虫草祭@福島市、土湯温泉で観察した冬虫夏草を紹介

する。

・京都市内の冬虫夏草

- (1) ガヤドリナガミツブタケ *Cordyceps tuberculata*
スライドの写真の個体は不完全型かもしれない。
- (2) スメリタンポタケ *Elaphocordyceps longisegmentis*
近縁種のタンポタケ *Elaphocordyceps capitata* と混同しやすい。
- (3) エゾタンポタケ? *Elaphocordyceps intermedia*
東北地方以南では今まで未確認である。
- (4) マルミノアリタケ *Cordyceps formicarum*
ムネアカオオアリの女王から発生している。
- (5) オオセミタケ *Ophiocordyceps heteropoda* 京都市内では今年が多産した。

サナギタケ *Cordyceps militaris* 京都市内では毎年ゴールデンウィーク前後に発生する。

- (6) クサナギヒメタンポタケ *Cordyceps kusanagiensis*
京都周辺ではよく見つかる。宿主は鱗翅目の蛹?
- (7) ハナアブラゼミタケ *Isaria nipponica* アブラゼミタケの不完全型。
- (8) アブラゼミタケ *Cordyceps nipponica* 京都市内では少なくない。
- (9) マユダマヤドリバエタケ *Polycephalomyces* sp. 極小サイズの冬虫夏草である。
- (10) キアシオオゼミタケ *Cordyceps cicadae*
ミヤマタンポタケ *Elaphocordyceps intermedia* f. *michinokuensis* 主に晩秋にコロモツチダンゴ *Elaphomyces* sp. から発生する。

・芦生研究林の冬虫夏草

- (1) コガネムシタンポタケ *Ophiocordyceps neovolkiana* 西日本ではブナ帯に発生する。
- (2) ムラサキクビオレタケ *Ophiocordyceps purpureostromata* ブナ帯のコメツキムシの幼虫から発生する。
- (3) アリヤドリタンポタケ *Ophiocordyceps myrmecogena* トビイロケアリの女王に発生したもので、京都府では初めての記録である。(東北地方、長野県、香川県での記録がある)
- (4) ミドリクチキムシタケ *Cordyceps atrovirens* ホソクソヒゲムシの幼虫から発生する。

・福島での虫草祭での冬虫夏草

- (1) ボクトウガオオハリタケ *Cordyceps* sp. 日本最大の?冬虫夏草。イタドリの根元に穿孔するコウモリガの幼虫から発生する。
- (2) ホソエノアカクビオレタケ *Cordyceps rubrostromata* ハエの幼虫らしきものから発生していた。

- (3) ウスキサナギタケ *Cordyceps takaomontana*
この不完全型はハナサナギタケである。
- (4) カメモシタケ *Ophiocordyceps nutans* とくにイタドリの群落の下に多かった。
- (5) トウチュウカソウ *Ophiocordyceps sinensis*
スープの中に入っていた。

14 斎木達也：フウノミタケいろいろ

フウノミタケ *Phaeomarasmius laccarioides* に関するいくつかの紹介。

2009年3月6日、大阪のY公園でフウノミタケを初めて見つけた。発生環境はコナラなどの落葉樹林で、モミジバフウ*の木が一本あった。フウノミタケは2001年、神奈川県川崎市生田緑地産の標本をもとに、高橋春樹さんが新種発表した種である。

傘は径 1.0~1.3 cm 茶から黄土色、吸水性があり、水を含むと赤茶色。頂点がやや濃い。やや周囲にうすい条線（ひだの筋）がでる。ひだは、直生、やや疎7~8枚/1cm、小ひだがあり、色は傘よりやや薄い茶色。柄は長さ 2.5 cm。膜の残りのようなあとがある。中空。幼菌には、くもの巣膜のようなものがある。胞子の形状は楕円形、5.5~7×4~5 μm。

キツネタケに感じは似てはいくはない。

東京、大阪、奈良の3拠点から見つかったものを比較したところ、モミジバフウの落下果実から発生していた以外に、落葉、枯枝などからも発生していたものもあった。

フウの落下果実からは子囊菌類の *Xylaria liquidambar* (和名無し)、その他いろいろなものも発生していた。

また、チャムクエタケモドキ *Tubaria furfuracea* はフウノミタケに肉眼的にも、顕微鏡観察でも似ているところが多いが、前者はチャヒラタケ科、後者はモエギタケ科である**。

* フウ (中国・台湾原産、タイワンフウともいう) とモミジバフウ (北米から中南米原産の落葉高木で、アメリカフウとも呼ばれる) 2種が日本では多いとのことである。

**新分類体系では、双方ともアセタケ科になっている。

15 上田俊穂：『最近』見たきのこ

最近とはここ数年間のことだが…。

- (1) ウスキキヌガサタケというが、うす黄色では

なくもっと濃い色である。滋賀県大津市のアカマツが生えている舗装道路沿いの一角。キヌガサタケに比べて怒り肩である。匂いも異なり、キヌガサタケの変種扱いだが別種のような感じがする。

- (2) 博物館の標本用に採取したもので、乾燥標本にするとさらに濃い黄色になる。
- (3) アカマツの朽木の樹皮の下にはウスキキヌガサタケの菌糸束らしいものが這っている。
- (4) 大阪府島本町のモウソウチクの竹やぶで見た寄添った新婚さんのようなキヌガサタケ。ウスキキヌガサタケより網の目が細かい。
- (5) 堺市大泉緑地公園のウッドチップからキツネノタイマツが多数発生していた。
- (6) 凶鑑を駆使してたどりついた「コゴメウスバタケ」。はたして正しい同定か？
- (7) 同じく、チャアナタケ。背着生が強く傘はできない、らしい。
- (8) チヂレタケも、よく見るとなかなかかわいい。ひだがたしかに縮れている。
- (9) 北海道大雪山の銀泉台のアオモリトドマツから発生しているマスタケ。上川キノコの会の佐藤会長は、このきのこを持ち帰り、薄切りにして味噌と酒かすを混ぜたものに漬け込んで保存食にするという。
- (10) 伊丹市の池田晴美氏から両手のひらほどの大きさのカンゾウタケをもらった。
- (11) それを切り身にすると、まるで「牛タン」のように見える。軽く湯がいて、二杯酔にみりんを酒を加えて漬け込み、冷蔵庫に入れておくと、いつでも食べられるという。が、まだ食べていない。
- (12) シラウオタケ。湿った朽木の表面が藻類で緑色になった状態のところから発生するが、このきのこは藻類とは共生しているらしい。きのこの内部に単細胞の緑藻らしきものが見える。
- (13) 北海道のシラカバの林で見たヘラタケ
- (14) *Squamanita* らしいきのこ。カブラマツタケやブンゴツボマツタケではないが、その類のように見える。
- (15) ホシミノヌメリガサ *Hygroaster* は、国内では広島市の牛田山で最初に見つけられた。その後、大阪府高槻市で1個体だけとったことがある。しかし2009年大津市「龍谷の森」で見え、さらに京都市左京区尾越でも発見された。くすんだ暗灰色の小さなきのこなので、見逃

されている可能性がある。しかし胞子を見るとすぐに見当がつく。最初、デニスがトリニダードで発見した。

- (16) 京都市左京区尾越、落葉樹林に多数発生していたカブラテングタケ。
- (17) 尾越のシロイボカサタケ。白いきのこの表面を写真であらわすのは難しい。
- (18) 仮称リュウコクヒナベニタケ。傘の直径5 mm〜20 mm。極小のベニタケ。コケの中や朽ち果てた木材から発生する。大津市の龍谷の森以外に、京都市内、城陽市、尾越などにも発生する。新種の可能性が高い。
- (19) これも龍谷の森によく発生するチチタケ属の一種。アシボソチチタケに似るが傘の周縁部の形状に違いがある。橋屋氏仮称のアカアシボソチチタケかもしれない。柄は赤みを帯びないこともある。
- (20) スエヒロタケ。ひだの稜線部が裂けるというのは奇妙である。なるほど広げた末廣の形をしていて、ひだが扇子の折り目のように見える。
- (21) 今年は大阪の自然史博物館で、はじめてきのこ展が催された。チラシのオオシロカラカサタケを切り抜いて起すとジオラマ風になる。

16 丸山健一郎：広島合宿の様子など

今年（2009年）の行事のいくつかの様子を紹介する。

・第471回例会が広島県民の森で行われた。場所は比婆山地でブナ・ミズナラ林である。

宿舎の料理は美味しかった。1日目の夕食後にミニ講演会とDVDの鑑賞会をおこなった。2日目の観察会は、宿舎周辺の散策組と比婆山への登山組に分かれて行った。目立ったきのこ、その他のいくつかを紹介する。

- (1) ホオベニタケ
- (2) サンコタケとハエ
- (3) ミヤマツチトリモチ（ツチトリモチ科の植物）
- (4) コナサナギタケ 普通のきのこであるがぶら下がった状態で発生しているのは珍しい。
- (5) 比婆山の山頂へ行ったが霧がかかっていた。
- (6) ワサビカレバタケ
- (7) ナメコ
- (8) スメリツバタケモドキ
- (9) クチキトサカタケ
- (10) アオイヌシメジ
- (11) タマゴタケモドキ
- (12) ヒメテングタケ（青木仮称）
- (13) カブラマツタケ

・今年のきのこ展（第18回）の様子を紹介

多くの来場者があり盛況であった。スタンプコーナーも新作のスタンプが並び人気があった。吉見先生の「小さなコップのヒミツ」ミニ展示や大阪自然史で開催中だった「きのこのヒミツ展」の紹介コーナーなどもあった。

・475回例会は奈良県の「生駒山麓公園」で行われた。初めての開催地で、バスで登って山麓公園の周辺を散策する班と、駅から山麓公園まで登山する班とに分かれて行った。途中から雨が降り出したが、同定会場には予想以上に多くのきのこが並んでおり、各分類群の特徴の説明なども聞け、充実した観察会になった。

閉会挨拶 森本繁雄事務局担当

以上の記録は上田が担当したが、全発表者に内容の点検をしていただいた。発表者または編者が内容に多少の追加をしたものもある。

会報記事投稿のご案内

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇原則として、投稿資格は本会会員に限ります(編集委員会から依頼する場合は例外とします)。
- ◇キノコやカビに関する記事、図、写真やイラスト、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇原稿の量は問いませんが、1600～2000字を目処にまとめていただくと幸いです。もちろん、これより多くても少なくてもかまいません。
- ◇図やイラストは黒インクで、刷り上がりの1.5倍程度の大きさでお書きください。カラーでの印刷はできませんので、白黒でも見やすい原稿の作成をお願いします。
- ◇写真の掲載を希望される場合は、あらかじめ編集委員会までおたずねください。(写真製版料をご負担いただく場合があります)
- ◇原稿は下記の送付先にお送りください。別紙に著者名、連絡先(住所・電話番号・FAX番号・電子メールアドレス)を書いて添付ください。ワープロなどをお使いの場合は、フロッピーディスクなどにテキスト形式のファイルで保存されたものを添付いただくようお願いいたします。また、電子メールを利用でき

- る場合は、電子メールでの投稿も歓迎いたします。
- ◇原稿の採否、掲載の順序、レイアウト等は、編集委員会の決定にお委せてください。
- ◇編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお委せてください。
- ◇原稿には表題、著者名、本文のほかに必要な場合は引用文献(あるいは参考文献)をあけてください。
- ◇著者校正は、初稿だけとし、原稿正本とともに返送ください。
- ◇掲載された原稿はお返ししませんが、図、写真に限り著者校正の際にお返しします。

<原稿送付先>

関西菌類談話会 会報編集委員会
 正井俊郎
 〒673-0844 明石市東野町2043-15-101
 TEL: 078-917-3923
 E-mail: toshiro@mug.biglobe.ne.jp

編集委員: 小林久泰, 丸山健一郎, 正井俊郎, 森本繁雄,
 上田俊穂, 横山和正 (abc 順・印は編集委員長)

表紙によせて

キツネノヤリタケ *Scleromitrla shiraiana* (P. Henn.) Imai

(子囊菌亜門盤菌綱ビョウタケ目キンカクキン科)

キツネノヤリタケをSさんから頂いた。「美人に撮ってね」と言われたが、果たしてどうだったかは不明。菌核より発生し、子囊果の頭部は写真のようにやや縦長で、縦方向の翼状のしわが入り、乳白色～灰白色。クワの木は山中にはあまりないので観察会で採集されることは少ないが、家の近所を散歩している時にふと気づく…感じのきのこ。春にクワの木の根元を探すと見つけることができる。撮影は室内で行なった。

マクロ 50 mm, 絞り F 22, 20 秒 森本繁雄

編集後記

昨年の総会で早期の発行をお約束しておりながら、会報の発行が大変遅くなったことをお詫び申し上げます。また、投稿していただいている一部の方には、新編編集委員会の引き継ぎが悪く、校正に長期間を要し、その間に写真の所在が不明であることが判明するなど、いまだに印刷をすることができずに多大なご迷惑をおかけしている次第です。写真を探し出して、できるだけ早く印刷できるよう編集委員一同努力いたしますので、ご理解いただきますようお願い申し上げます。(正井俊郎)

関西菌類談話会会報 No. 28

2011年3月22日 印刷

2011年3月25日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

ホームページ <http://kmc-jp.net/>

事務局 〒612-0879 京都市伏見区深草西出町25-4

森本 繁雄 方

郵便振替口座 00950-0-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る